

文珠山古墳

— 土砂崩壊防止擁壁工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

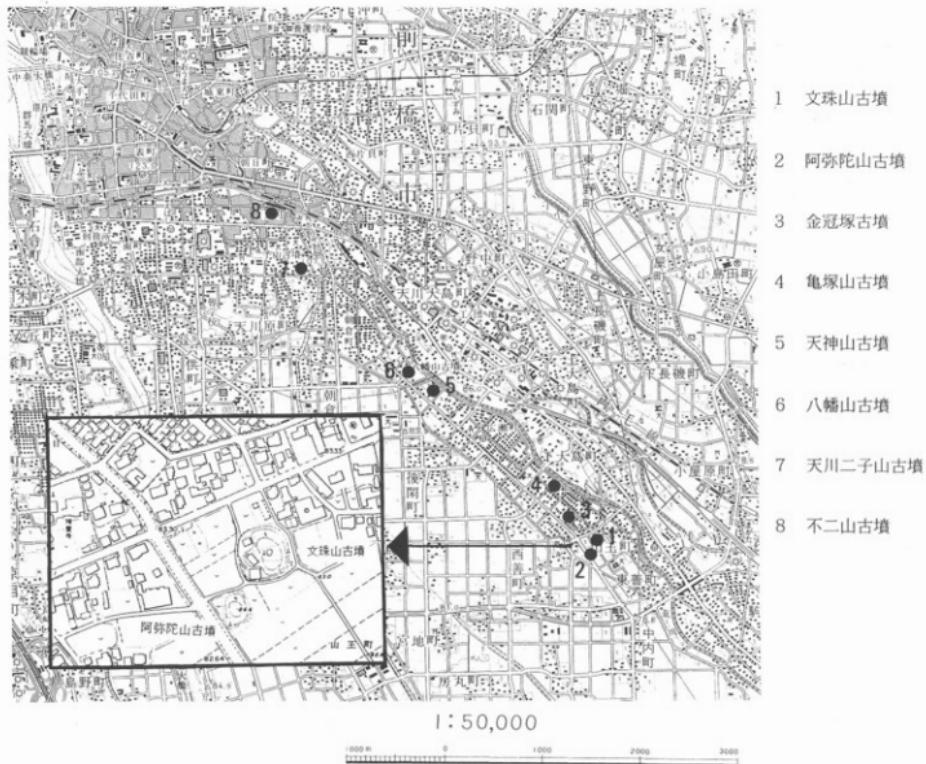
はじめに

本書は文珠山古墳土砂崩壊防止擁壁工事に伴う文珠山古墳の埋蔵文化財発掘調査報告書である。本発掘調査は、日吉山 梵養寺の協力を得て、前橋市教育委員会が実施した。

調査の経緯・経過

日吉山 梵養寺より確認調査依頼により、平成7年3月22・23日に工事予定箇所に事前に試掘調査を行った。その結果、工事予定箇所より葺石を施した古墳埴丘面が確認されたため、本遺跡の取り扱いについて協議し、現状保存が不可能な範囲について、本発掘調査を平成7年5月16日から5月22日まで実施した。

なお、測量の基準は、文珠山古墳・阿弥陀山古墳の現況測量の際に設定した測量杭（T. 4）を基準点として行った。T. 4の公共座標は、第IX系（X = +38,847.4956m、Y = -63,640.5273m）である。





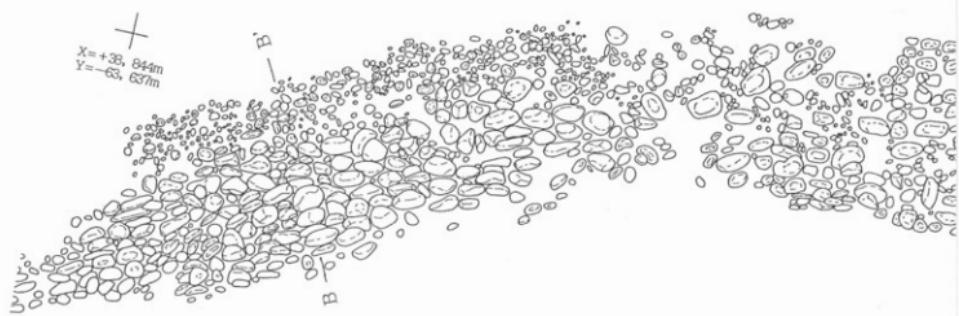
文珠山古墳

発掘調査範囲



阿弥陀山古墳

0 1/500 25m



$X = +33, 844m$
 $Y = -63, 637m$

$X = +33, 844m$
 $Y = -63, 637m$

$X = +33, 844m$
 $Y = -63, 637m$

試掘トレンチ

$X = +33, 844m$
 $Y = -63, 637m$

$X = +33, 844m$
 $Y = -63, 637m$

B L = 83. 50m B'



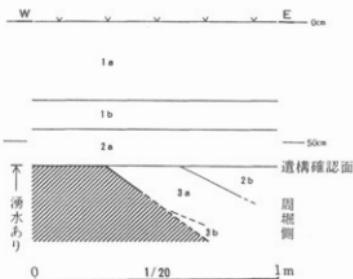
0 1:40 2m

文殊山古墳 土層説明

- | | | |
|-----|--------|----------------------|
| 1 層 | 暗褐色粗砂層 | 黄褐色輕石（1～2mm）を2～3%含む。 |
| 2 層 | 暗褐色細砂層 | 黄褐色輕石（2～3mm）を2～3%含む。 |
| 3 層 | 黒褐色微砂層 | 黄褐色輕石（2～3mm）を5%含む。 |
| 4 層 | 黒色微砂層 | 3層と6層の混じった層。6層が中心。 |
| 5 層 | 褐色微砂層 | |
| 6 層 | 黄褐色細砂層 | 川砂。 |

◎文珠山古墳の西側の開発の際に実施した試掘調査（平成6年8月31日実施）

試掘調査は、文珠山古墳の墳丘主軸ラインのほぼ平行（東西方向）に3本のトレンチを設定し、重機を用いて掘削を行った。断面・下面精査の結果、3本のトレンチすべてから文珠山古墳の周堀外縁部側の立ち上がりを確認検出した。しかし、遺構確認面付近において湧水がみられ、周堀の下端の確認するまで掘り下げを行うことはできなかった。検出できた範囲での土層観察では、周堀の覆土より、B軽石純層、さらにFAと思われる火山灰層も確認された。

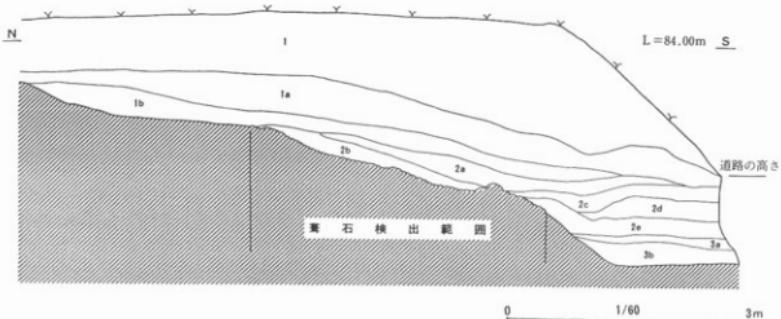


文珠山古墳西側開発の際に実施した試掘調査

周堀外縁部側の立ち上がり部分の層序説明

◎文珠山古墳土砂崩壊防止擁壁工事に伴う試掘調査（平成7年3月22・23日実施）

工事予定箇所が文珠山古墳の西側から南側の墳丘部分もしくは周堀部分にあたるため、試掘調査を実施した。古墳の西側に設定した2本のトレンチでは、道路付近まで河原石を施した葺石が検出された。南側のトレンチでは、古墳の墳丘部分と周堀部分が検出された。墳丘部分では、人頭大の河原石と拳大の河原石を用いた葺石が確認された。また、周堀の覆土からはFA火山灰をブロック状に含む層が確認された。



文珠山古墳試掘

1 層	黄褐色粗砂層
1 a 層	黄灰色粗砂層
1 b 層	暗褐色粗砂層
2 a 層	黒褐色粗砂層
2 b 層	黒色粗砂層

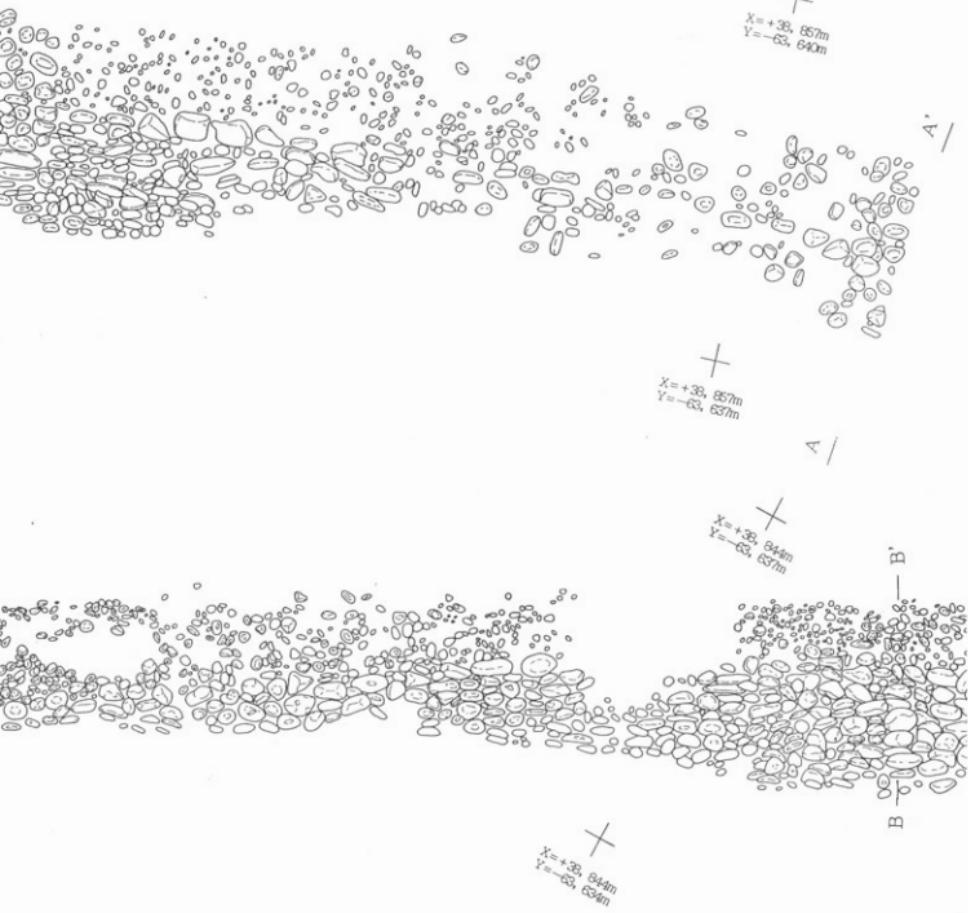
3トレント層序説明

葺石と思われる河原石等を含む。

2 c 層	黄灰色細砂層
2 d 層	灰黄色細砂層
2 e 層	黒色微砂層
3 a 層	黒橙色微砂層
3 b 層	黒色粗砂層

B軽石が少量混じる。

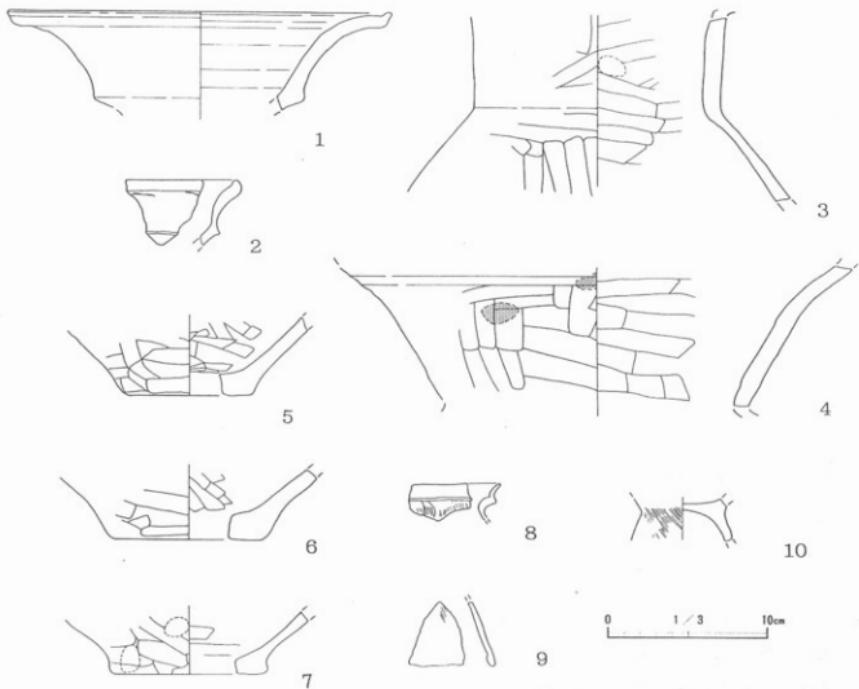
FAがブロック状に入る。



遺構について

葺石を施した墳丘及び最下段平坦面が検出された。葺石はすべて河原石を用いており、古墳の部分によって、大きさに規則性が見られた。墳丘斜面には大きめの石（人頭大程度の河原石）を葺き、平坦面には小さめの石（拳大程度の河原石）を配していた。さらに、墳丘斜面の最下段にやや大きめの石を配し、平坦面との変換点を形成している。また、墳丘の傾斜角度は、 $25\sim30^\circ$ であった。仮に現在の古墳の高さが構築当時と大きく異なるとするならば、この立ち上がり角度では古墳の現状よりかなり大きくなってしまうため、中段に平坦面の存在が考えられる。

墳丘の断ち割り調査では、古墳の地山にC軽石を含む層が認められたため、文珠山古墳の構築時期を決める一つの指標になると考えられる。なお、今回の調査範囲では、古墳構築のための盛土部分は検出されなかった。



出土遺物について

遺物の出土はすべて葺石を覆っていた土中からである。このことから、出土遺物は今回調査された範囲よりも上位からの流れ込みと考えられる。墳頂部もしくは今回の調査範囲より上部にあると思われる平坦面（墳丘の立ち上がり角度から考えると中段に平坦面の存在が予想される）に設置されていたものが崩落したものであろう。出土遺物は、壺形土器と石田川式土器の2種類に大別される。

壺形土器はすべて底部に穿孔がなされていると思われるものである。1・2は、壺形土器の口縁部で横撫でが見られる。2点とも頸部が欠損しているため、断定はできないが、二重口縁なると考えられる。3は、頸部がほぼ直立に立ち上がることから、所謂有段口縁になると推定される。4は、頸部の角度から考えると、有段口縁と推定される。さらに、その一部には赤彩を施した痕跡が見られる。このように1～4の土器では、頸部の立ち上がり角度に特色が見られ、口縁の形態の異なる二重口縁と所謂有段口縁の2種類が存在していたといえる。5～7は、底部に穿孔が施されているものである。いずれも破片であり、口縁部は不明であるが、壺形土器になると考える。特に、7は3と同一個体と考えられるほど、胎土・焼成等に類似点が見られる。図示した壺形土器は、2が小型であることを除くとかなりの大型なものといえよう。

8～10は、すべて石田川式土器の台付甕である。8は、S字状に屈曲した口縁部で、横撫地及び刷毛目が施されている。9は、内側に折り返しが見られる脚部である。10は、台付甕の底部から脚部にかけての部分で、外面に斜め方向の刷毛目が見られる。

なお、今回の調査範囲での出土した壺形土器は55点、石田川式土器は37点であった。



1. 文珠山古墳全景(阿弥陀山古墳から)



2. 莢石検出状態(北西から)



3. 莢石検出状態(西から)



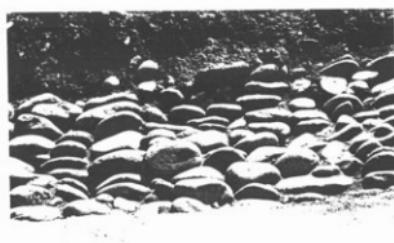
4. 莢石検出状態(南西から)



5. 莢石検出状態(南から)



6. 莢石検出状態(南から)



7. 墓丘斜面の葺石検出状態(西から)



8. セクション(北から)

まとめ

今回の発掘調査では、周堀の墳丘側の立ち上がり部に小さな河原石の葺石を施工した平坦面が認められ、大きめの河原石を変換点に配し、墳丘斜面になることが判明した。葺石は調査範囲のほぼ全面において隙間なく検出され、その精巧な施工が確認された。調査範囲で古墳の形を考えると、円墳であるといえよう。

さらに、古墳の構築時期について考察すると、事前の試掘調査において、周堀の下部付近よりFAらしき火山灰層もしくはFAブロックが確認されたことから、FA降下以前に造られた古墳となる。また、今回の発掘調査において、墳丘の地山にC軽石が見られたことから、C軽石降下以後の構築となる。すなわち、4世紀中葉から6世紀初頭の間に造られた古墳である。

また、出土遺物から考えると、古墳時代の前期の構築といえよう。遺物の数が少ないため、断定はできないが、底部穿孔壺型土器、石田川式土器の出土により、天神山古墳の構築からそう遠くない時期と考えられる。朝倉・広瀬古墳群の中では古い時期に属する円墳であるといえよう。

今回の発掘調査によって、文珠山古墳の解明についての貴重な資料が得られた。最後になったが、本発掘調査でご協力いただいた方々に深く感謝いたしたい。

抄録

フリガナ	モンジュヤマコフン
書名	文珠山古墳
副書名	土砂崩壊防止擁壁工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	園部守央 大山知久
編集機関	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1996年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		測	座標	北緯	東経			
モンジュヤマコフン	マユバシシサンノウマチ					19950516		
文珠山古墳	前橋市山王町	10201	7G12	36°20'53"	139°07'27"	19950522	70m ²	擁壁工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
文珠山古墳	古墳	古墳時代	古墳	土師器（石田川式土器…台付甕） 土師器（底部穿孔壺形土器）	・墳丘面に葺石を検出 ・墳丘斜面・平坦面を確認